
長中魂



平成29年6月28日(水)

第8号

伊豆の国市立長岡中学校だより
文責 守野 和弘

第13回伊豆の国市社会福祉大会

福祉体験発表 3年生 柏木夕希奈さん

6月24日(土)、アクシスかつらぎにて第13回社会福祉大会が行われ、中学生による福祉体験発表が行われました。本校からは柏木夕希奈さんが代表として参加し、「祖母へのプレゼント」という題名で発表しました。高齢者に対する福祉とは何かを改めて考えさせられる、祖母に対する実体験を通じた素晴らしい内容でした。以下、発表文を紹介します。

「祖母へのプレゼント」

長岡中学校三年 柏木夕希奈

その時は、たいしたことじゃないと思っていました。朝、祖母がいつものように起きてくると、

「なんだか肩が痛いわ。」

と言います。その祖母に対して私は、

「大丈夫?そのうち治るら?」

と思いのない言葉を口にし、大して心配はしていませんでした。しかし、その日祖母は一日中布団の中で寝込んでいました。夕方、祖母の部屋の前を通ると、祖母の肩を痛がる声が聞こえてきました。その姿を見て私は、

「そんなに痛いなら病院行けば?」

と言いました。本当に痛がっているんだと感じた私でしたが、今思えば、その言い方はあまりにも冷たすぎる言い方でした。夜になると、祖母が肩を押さえながらふらふらと、母と私がいるリビングへ来ました。

「痛い。病院へ行く。こんなに痛がっているのに夕希奈は病院へ行けばなんて他人事だし!」

そう言って泣きはじめてしまいました。それを見て母が慌て出しました。何をしても「痛い!」と叫ぶ祖母を見て、私はようやく自分が冷たい態度をとっていたんだと気がきました。祖母は母に連れられ病院へ行きました。一人で家にいた私は、いつも私の世話をしてくれている祖母があんなに痛がっていたのに、どうしてあんな態度をとってしまったんだろうととても反省しました。

病院へ行き、原因が分かった祖母でしたが肩の痛みはすぐに消えることなく、祖母の体力を奪っていくようでした。その後の数ヶ月は今までの元気な祖母の表情とは違い、とても疲れたような顔をしていました。私はそれからというもの、自分で出来ることが減ってしまった祖母に対して、私が代わりにできることは積極的にやってあげようと思いました。特に年末年始の大掃除や、おそばの配達などの力仕事は、例年になくがんばりました。

ところが日が経つにつれ、行動範囲が狭くなってしまったことにストレスを感じている祖母の姿が目立つようになりました。それに対して、祖母の友人や私の母は、

「今まで頑張りすぎたんだよ。」「神様がくれたお休みなんだよ。」

と声を掛けていました。しかし私は、祖母を助けることでやること全てを奪ってしまっているのか、祖母のできることさえも奪ってしまうことが祖母の元気をなくさせているのではないかと、接し方を考えるようになりました。



思い出したのは、中学1年生の時、福祉体験で老人ホームへ行ったときの事です。施設の方からは、「人生の先輩としてお話を聞いて下さい。」

といわれました。施設の利用者の方はたくさん私の知らない話をしてくださり、その内容は人生の知恵として今も私の中に残っています。そして今、私は生徒会役員として仕事をしていますが、人の役に立てることに喜びを感じています。ここに高齢の方との共通点がありました。



人は人から必要とされ、人の役に立つことで充実感を得られているのです。それは年齢に関係ないのです。祖母に限らず高齢の方と接するときには、まずいたわること、できることはやっていただくこと、私たちが感謝の気持ちを表すこと、そして人生の先輩の知恵をいただくという姿勢を持つことが大切なのだと私は思うよう

になりました。そうする中で、生きる喜びを感じてもらえたらと思います。

今まで世話をしてくれた祖母に、充実した幸せな時間をプレゼントしたいと、心からそう思っています。私は祖母と、これからもずっと一緒に過ごす時間を大切にしていきます。



一人一授業公開・紹介②

～『対話を通して深く学ぶ授業作り』を目指して～

☆☆**学習課題**「ルロイ修道士の人物像をとらえ、主題にまとめよう」☆☆

高安敬寿先生（3年1組・国語）

3年生の題材として、井上ひさし作「握手」があります。主人公は戦時中、ルロイ修道士の孤児院で育てられます。戦後、成長した主人公が、久しぶりに再会し、修道士の死期が迫っていることを知るとともに、握手の弱さに思いを募らせるといふ物語です。本時は、この題材での最後の授業です。

「走れメロス」の主題が『友情』に関わるものであるように、この「握手」の主題は何かを考え、まとめてみよう。」が課題です。まずはルロイ修道士がどんな人物であるのかを中心に振り返りました。文章を根拠に、「日本兵に指をつぶされ



ても嫌な顔をしなかった。」「戦後も敗戦国の子どものために日本に残った。」「戦後、子どもたちの活躍を喜んでいる。」等を読み取り、「愛がある人」、「優しい人」、「子ども思いな人」などが出ました。それを踏まえてこの物語の主題は何か、まずは個人で追求しました。その後、グループでの対話を通してまとめていきました。

各グループでは、個々が意見を出しながら議論し、何度も推敲していき、最終的には「同じ人間に対して愛を伝えた物語」、「ルロイ修道士と孤児院の子どもたちの深い愛情の物語」、「大きな愛はみんなに届く」等、サブタイトルになりそうな文言にしていきました。

さて、高安先生の国語教師としてのモットーは、「『よりよい国語の使い手に育てること』。人生の中では学校で学んでいる時間は短く、社会に出てからの時間の方が圧倒的に長い。その時、自分で本を読解できる読み手であること、勤め先や地域社会で、様々な要請に応じられる文章の書き手であること、また自分の考えを言える話し手であること、そして相手を理解しようとする聞き手であること。そういう大人になってほしいという思いをもって、日々の授業を行っています。」とのことでした。

本時のグループでの対話も、それを意識しての取り組みの一つであることがよく分かりました。

